

I L C 解説セミナー 質問・意見 令和6年2月17日(土) 一関市川崎町

No	質問者	質問分野	質問・意見	回答
1	一関-1	ILCの動向	ILCについて、国民の理解が足りないといった指摘もあったがと記憶しているが、国民の理解を深めるための動き等どのように進んでいるのか伺いたい。	国民の機運醸成は非常に重要であり、一関市や県、各種団体が協力して取り組んできた。残念ながらコロナ禍で大きな集会等が開けない状況があったが、令和5年4月以降徐々に機運醸成に向けた取組が活発になっており、具体的には、令和5年8月に建設候補地決定10年を迎えた際、その前後にはたくさんの講演会等が開かれマスコミにも取り上げられた。引き続きこうした取組をより活発に展開していく予定である。
2	一関-1	ILCの動向	予算の増額等前向きな動きもあるが、政府のILCに対するスタンス、認識について、最新情報を伺いたい。	政府の動きとしては、令和5年度当初予算には、令和4年度から倍増となる9.7億円の予算が措置され、ILCテクノロジーネットワークの取組に資する予算だと政府からも説明されており、来年度(令和6年度)も同様に着実な取組が継続できる予算として、10.5億円の予算が政府予算案に計上されている。 国際共同による研究開発が着実に進むということで県でも評価しているところであり、政府の誘致表明が早期に実現するよう、引き続き国への働きかけを行っていく。
3	一関-1	ILCの動向	東京駅周辺にはILC誘致に向けた看板等は全く無い。東京駅周辺でのPR等思い切ったプロモーションの取組が必要ではないか。また、今年中に日本政府が手を挙げなければ、もう日本(誘致)の可能性が無いんじゃないかと発言される研究者もいると伺っており、誘致に向けスピード感を持った戦略をどのように考えているのか。	当面のタイムラインとして、KEK山内機構長から、ヨーロッパの大型加速器の実現可能性調査の結論が来年2025年に出る、そこが誘致判断の一つの節目になるとの説明がなされており、ここ一年か二年の間の取組がとても重要になると認識している。 首都圏向けPRへのアイデアもいただいた。県でも機運醸成の取組を強化させるため、来年度予算も増額しており、首都圏向けのPRを重視し、今まで築きあげた人脈等を活用しながらPR等の活動を展開していきたい。
4	一関-2	波及効果	経済効果と雇用について、20年間で経済効果は2兆円、雇用に関しては14万5千人という話があった。具体的にどれぐらいの会社が一関に工場進出を考えて、どれぐらいの大きさの規模の工業団地ができるのか。	紹介した経済効果については、どの市にどれぐらいの企業が立地することを想定した積上型の試算ではないため、具体的に一関市にどれぐらいの工場が整備されるかといった根拠は無い。これからILC施設の建設、建設のための施設、物流施設等が実現に向けて様々検討をされていく中で具体化されるものと考えており、具体的には市や町と相談しながら進めていくことが重要である。
5	一関-2	波及効果	居住者も増えるとのことだが、未来の子供達に残す大学の設備がどのくらいできるのか。	教育、人材育成については、岩手大学でも地域連携ということで地域の特徴的な産業拠点に例えばサテライトを設ける事例がある。ILCのような大規模な研究施設ができる場合、岩手大学のみならず地域全体で研究所と連携していくことが想定され、それを契機として教育研究の場が広がっていくと考える。
6	一関-2	環境配慮	岩手、東北全体が道路交通網や電車網が他地域と比較して遅れていると思う。ILCという大型プロジェクトが実現した場合、巨大な機材の運搬等に問題はないのか。建設車両の増加による事故等の発生についても不安がある。	交通インフラについても現在検討が進められており、様々な課題もある。その解決も含め、どういった街づくりを行うのかというモデルとして検討を進めているところであり、今後、建設も含めて、研究者や家族を受け入れるために必要なインフラを具現化していく必要がある。検討しているモデルケースが公になった後に、市や町地域の皆さんとともに一緒に考えていくことになる。

I L C 解説セミナー 質問・意見 令和6年2月17日(土) 一関市川崎町

No	質問者	質問分野	質問・意見	回答
7	一関-3	安全対策	日本は地震国であり、こうした場所でILCを誘致することは本当に可能なのか。	安全に関する発表資料の参考資料19ページに地震の影響について記載している。江刺に潮汐観測施設はILC候補地と類似した環境にあり、東日本大震災において全く被害が無かったと聞いている。つくばのスーパーKEKBというマシンも、東日本大震災の際壊滅的な被害は無かった。このため、地震が多いという理由でILCが他の地域に建設されるということはないと考える。
8	一関-3	ILCの意義	高齢化少子化で人がどんどん減っている中で、ILC建設により、人口が増えるだろうとの説明だったが、そうした問題ではなく、今の子供達にこういった可能性があるといった夢のある話が地域の子供たちから聞こえてこない。ILC誘致を実現してほしいのだが、本当に実現するのか不安である。	人口については、地域全体として来ていただける研究者の皆さんや関係の方々が確実に増えるとは言える。 子どもたちに対しての活動として、出前授業等に県南広域振興局や各市でも取り組まれており、若い世代への理解促進にも取り組んでいる。 今後まちづくりのモデルケールを様々検討していく中で、地域に夢を持っていただけるような方法、少子高齢化が進む中でのまちづくりを、地域の皆さんと議論していきたい。
9	一関-4	ILCの動向	中国の動きに関心があるが、CERNには中国の研究者は参加しているのか。またILCについても中国が参加する可能性はあるのか。	一般的に基礎科学の研究では国籍と関係なく別の国の研究機関で研究を行うことはよくあることである。このため中国の研究者がCERNの実験施設で実験しているのは自然なことである。ILCについて中国政府が関与するかどうかは政府間協議によることになる。
10	一関-5	安全対策	放射線以外でも、安全面での課題は無いのか。	放射線以外の安全対策の課題として、火災、地震、ヘリウム漏洩が挙げられる。これらの対策についてはCERNのLHCやKEKのSuperKEKBなど既存の大型加速器施設でも共通のものであり、それらの経験を踏まえた検討を行っている。
11	一関-6	安全対策	(冷却水システムで)回収した廃熱は、地上で何度となるのか。 熱交換を2段階、3段階で行うのは、安全性を確保するために必要なのか。	地下から送られてくる冷却水の戻り温度は約60℃になる。 冷却水システムは熱交換器を介した多段階の閉循環系で構成している。これは安全性の確保のみならず加速器装置の精密運転のためにも必要である。加速器部分の冷却水を他と分離する、長い地下トンネルで扱う冷却水量を適切な容量とする、さらに地下と地上の高低差(水圧)に対する揚水系を実現するためにも必要となる。